

論 叢

近世佛教衰微之由來と民心の離叛

辻 善之助

近世に於ける佛教の衰微の由來を考ふるに、

第一に僧侶の墮落

が其大原因を成して居ることは、いふまでもないことである。

第二に佛教の形式化

したものである。佛教の形式化は、一般にこの時代の文化の形式化に伴ふことであつて、必しも佛教のみに限つた現象ではない。即文化が型にはまり、固定し凝結し、爲めに圓滑に流動せず、彈力を失うた。佛教に於ける形式化としては、一には新儀の禁止せられたこと、即研究の自由を束縛せられたこと、之に因つて一宗と他宗との諍、宗内の同志討が多かつた。例せば、淨土宗と本願寺との宗名争、東西本願寺の本末争、各宗内に於ける異安心の争などを擧げることができる。また信仰

の内容が形式化した。蓮華往生とか本願寺における小兒往生の論争の如きそれである。

形式化の二は、檀家制度である。その起因はもとより戰國時代にあることであつて、大名と寺院との結合に始まつたことであるが、江戸時代に及んで、幕府と佛教との結合により、佛致寺院は幕府の保護に安んじ、寺院は貴族化して、爲めに民心離叛のもとを成した。

形式化の三は、本末制度と階級制度である。これ亦寺院の自由を束縛して、その腐敗の因を成した。かくてまた寺院の貴族化に向つて進んだ。かくの如にして、民心は漸く佛教を離れた。然しながら、この民心の離叛は、江戸時代に於て、遽に起つたことではなくして、既に足利時代より萌して居たことである。山崎宗鑑の犬菟玖波集に「來迎の阿彌陀は雲を踏み外し」といふ句に連ねて「彩色の佛の箔はみな剥けて」とある。古い來迎佛の像をそのまま直寫したものと思れば、それまでであるが、然しながらよく考へてみれば、此句には、もつと深い意味が含まれてある。作句者は知つてか知らずでか、佛教が民間の或る一部分には最早茶化されつゝあつたことが見られる。信仰の力が薄らいで、如來を馬鹿にして居るのを見ることが出来る。昔信仰の力盛なりし時ならば、如何に滑稽に言ふとても、かゝることはおくびにも出さなかつたことであらうと思ふ。この一句よく時代の相を語る。狂言に出て來る僧侶を見ても、多くは無學暗愚であるか、慾張りか卑猥なものである。「宗論」に於て「五十展轉隨喜の功德」を、双物で以て薙倒し、芥子で辛々と齧へ、檀方がたて下

さる時は、尊うてありがたうて涙こぼるゝを以て、五すゐてん／＼ずゐきの功德又は涙とも解くといひ、「笠の下」の僧が宿の主人と徹宵對酌して歌舞したり、「泣尼」の慾張り「鹿狩」「水汲新發意」の無智貪慾鬻間女犯等みなその例である。

文明前後より、卜部兼俱の唯一神道の起つたのも、之を一面より見れば、神道が佛法を離れんとした傾向を示したもので、從來の本地垂迹の説を翻して、神本佛迹の説を唱へ、思想界に一旗幟を樹てやうとしたものである。これ又佛教の衰を示すものに外ならぬ。

佛教が衰へて儒教が之に代らんとする傾向も、早くより現れて居る。平家物語に、佛教趣味が多くして、太平記に儒教趣味が多いのも、亦その一例證であらう。またこれと同じ兆候は、禪僧の中に、儒學にかゝはるものゝ多いことによつても知られる。室町時代には、文筆の事多く禪僧の掌る所となつて、隨つて文化は禪僧によつて傳播さるゝ場合が多かつた。然しながら、禪宗は之が爲めに文筆の宗となつて、不立文字の宗旨却て文字を尊ぶに至つて、學道のことは寧ろ末になるの傾向があつた。この傾向は、夙く鎌倉時代より萌して居たものと見えて、大覺捨遺錄に、遺誡五條の内に、參禪學道者、非四六文章、宜參活祖意、莫念死話頭とある。南北朝前後には、この傾向は殊に著しくなつた。竺仙錄に、或る日裔翔侍者問ふ、大半詩及文章を作るには、如何せば僧家本宗の事たるべきかと。竺仙答へて曰く、僧は宜しく學道を以て本となし、文章は之に次ぐべし、但よく道

を會して而して文を能くせざる妨なきなりと、翔曰く、多く日本僧を見るに、文を以て本となし、學道は之に次ぐ、翔、杜子美を見るに、文章は一小技なり、道に於いて未だ尊しとするに足らず、況や縉流をや、故に竊に恨となす、然らば如何にして道を學すべきか。竺仙曰く、汝よく之を知るは敬すべきなり、我國の僧但能文ありて、而して宗門下の事絶えて知らざる者は人之を誦る、呼んで百姓僧となす、若し僧文を爲り宗教を失はずんば、則ち重んずべき也云々と。夢窓國師は其の遺訓に於て、文筆にのみ携はるものは剃頭の俗人にして、弟子の下部にも入ることはできぬといつて居る。その文に曰く、

我有三等弟子、所謂猛烈放下諸緣、專一窮明己事、是爲上等、修行不純、駁雜好學、謂之中等、自昧已靈光輝、只嗜佛祖涎唾、此名下等、如其醉心於外書、立業於文筆者、此是剃頭俗人也、不足以作下等、矧乎、飽食安眠、放逸過時者、謂之縉流耶、古人喚作衣架飯囊、既是非僧、不許稱我弟子、出入寺中及塔頭、暫時出入尙以不容、何況來求掛塔乎、老僧作如是說、莫言欠博愛之慈、只要他知非改過、堪爲祖門之種草耳、

空華日工集の中にも、義堂は、今時の禪子偈を作るや變じて俗人の秀才花鳥の詞を爲す、是れ痛惜すべき也、假令詩を作るも、禪祖の體を學ぶべしといひ、又或る時には、其の弟子のために、右の夢窓國師の三等の弟子の遺訓を説いて居る。又弟子の質問に應じて、其の因に、今時の兄弟は唯俗書を

是れ學ぶ、故に宗門の言句に於ては、魚の木に上るが如く、自在を得ず、近古の尊宿は唯だ禪機是れ參ず、故に警發する所多しと諷めて居る。又或る時は、某僧の儒書を學ぶを非難して、佛法に附ける外道なりと云つて居る。禪僧が寢く文學に親んで、文字の遊戲三昧裡に彷徨し、禪宗の本旨に遠かつて、形は禪僧で、心は文學者たるに至れる状態が見られる。

斯様にして、禪僧は多くその文筆を以て將軍大名の文事秘書として用ひられた。中には勢ひその文筆を以て、將軍大名に媚び諂ふ者も少からず有つた。將軍大名等は、禪宗と限らず、一般に眞に佛教信仰を有するものは稀であり、禪僧の之に近くものも、經文を講ずる事は極めて少い。尊氏の如き篤信者は別として、其の後の人になつては、如何ばかりの信仰が有つたか、疑はしい。其の禪宗に親近して佛事に趣味を有するが如く見ゆる者、義滿義政の如きがあつたけれども、多くはこれ所謂御大名藝である。其の御大名藝に對して、五山僧は幫間的に四六駢驪を翫び詞華文藻を飾る者比々として皆是である。五山文學の書を繙き見るに、斯かる例は到る處に充ちて居る。固より其の内二三の氣慨ある者無きに非ずと雖も、大勢の赴くところ、遂に五山佛教をして貴族佛教たらしめ、禪僧をして俗儒者俗文學者となり變らしめた。惟忠通恕の雲壑猿吟に、

細川右典概源公、是歲屯兵備中二萬山側城、未及攻盭賊、既平、然宿留久矣、予飛錫來謁、偶值中秋佳節、賞月陟山、々頂間寂、只聞鼓角聲而已、想將帥法令之嚴、憫士卒遠戍之意、賦詩自遣云、

二萬山者神功皇后出二萬之師云、

驅役神兵憶昔年　爲君誰復助威權

樓頭鼓角三更後　萬馬蕭々月在天

男兒只貴得封侯　生不成名死不休

今夜戍樓吟看月　清光爭似故山秋

此等を見ても、禪僧の面目が何處に在るか、宛ら俗人の詩であつて、細川頼之に媚ぶる意味がありと見えて居る。此は唯その一例である。尺素往來の中にも

近來問叢林出世之僧侶者、^{イダブラニ}閑^{サンナイテ}　閑　法門之鼻孔手段、偏嗜儒家之文字言句

と言はれるやうになつた。東福寺の大極藏主も、亦碧山日録に於て、禪家の儒書に耽り之に陷溺することを歎じて、儒書を學ぶは異術であるが、之によつて外侮を禦がんが爲めである。然るに今の佛者は、一に外書のみを學んで、其嗜好に耽るは、異術を盛にして却て外侮を長ずるものであるといつて居る。その文に曰く、

長祿三年十二月八日

八日内辰、佛成道、燒香諷經、凡學釋氏者、一生可得以竺墳爲業、以觀心爲行者也、然而學諸子百家之書、爲知其異術、禦其外侮矣、大覺世尊十九而見四等事出家、車匿之嚴駕、逾城而去於檀

特山中修道、又至象頂山、同諸外道、日食麻麥、經于六年、以無心意、無受行、而摧伏諸道、先歷試邪法也、今之爲佛者、乃不然、一學外書者、自幼至長不改其嗜好、是乃盛其異術、長其外侮也、以可悲矣、

明應七年の抄本江湖風月集の中にも、當時五山僧侶の文學に耽るを難じて、是れ儒者にして禪僧に非ずとまで極言して居る。

日本デモ靈彦侍者ハ、下炬拈香ヲメサレズ、頤ナンドモ鼠骨ニハツクラレザルト也、……又天龍寺春林和尚モ、終ニ下炬拈香ヲバメサレズ、鹿苑院ニマデナリタル人ナレドモ、一期間停止之、鹿苑院デアル程ニ、トライデカナワサル布施ヲバ、鹿苑院ニ半作ノ塔アリ、爲建立盡ク寄進スルト也、平生云ク、無眼子ニテ布施ヲトルコトハ大ニヲロシキコトデヤ、明眼ノ人ノ言句ハ、イカ様ナルコトヲシタリ共、自然ニ面目可備、佛祖已來此道ヲ心得ザル者ヲバ、出家トハイハザルゾ、文字バカリアル人ハ儒者デヤ、其上宋朝已來、儒者ハ東坡山谷ヲハジメテ、參禪ヲシタ、文字バカリノ僧ハ、惟肖江西ヲハジメテ、儒者デコソアレ、禪僧デハナイ云々、

儒佛一致論又は三教一致論若くは三教調和論の現れたのも、亦一面より見れば、儒教が佛教に代るの前兆といふことができる。三教一致といふことは、其の淵源を求むれば、古く支那に在つて、後漢時代に迄溯ることが出来るが、其の盛になつたのは、宋時代の事であつた。この時代に、朱子

學大に勃興して、佛教を以て仇敵となし、排佛の聲が朝野に滿ちた。明教大師契嵩出で、儒佛一致を唱へて輔教篇を著し、又幾多の論文を公にして、宋儒に對抗した。其の文章は鐔津文集に收められて居る。歐陽修李太白の如きは、之を見て己が短見を愧ぢて佛教を研究し、王安石、蘇東坡、黃山谷、陳師道、張商英の如きは、何れも終に佛教に化して、其の外護たらんことを期するに至つた。張商英は後に護法論を著して、遠くは韓愈近くは歐陽修等の排佛の淺薄なることを批評した。汾陽善昭、北礪居簡、石田法薰、虛堂智愚、雪巖祖欽、中峰明本、天如惟則等も、各その語録の中に、三教一致の説又は之に關する頌をのべて居る。中にも虛堂及び中峰は、我國禪僧の就て學んだものも少からず、その流は脈々として永く傳はつて居ることであるから、その影響も少からぬことであらう。鐔津文集以下の書物は、南北朝より足利時代にかけて、叢林の間に傳へられ、鐔津文集は、春屋妙葩の手によつて板行せられた。又尺素往來には、當時の讀物の中に、北礪文集を計へ、中峰廣錄も、亦足利の初には、本邦に於いて開板せられた。また我五山僧侶の間に、四六文の明星として仰がれたる元の大訶笑隱の蒲室集にも、亦三教圖讚がある。此くの如くにして、三教合一の思想は、五山僧侶の間に瀾漫して居た。

扨て我國に於て、最もはやく三教合一思想をのべたのは、東福寺の開山圓爾辨圓（聖一國師）である。即其年譜に、文永五年に堀河の大相國基具に三教の主旨を述べ、三教要略を著すとある。次に

宋の歸化僧大休正念の語録にも、三聖の圖の讚あり。また爲武藏守殿供養儒釋道三教陞座の語あり。祖元子元の語録にも 三教圖讚がある。兀菴普寧錄にも、建長寺入寺語に三教思想に關するものあり。稍時を隔て、中巖圓月の三教合一思想に關する言論の如きは、最も見るべきもの、一である。彼は中正子に於て、儒佛二教綜論を唱へて、以釋内焉以儒外焉といひ、東海一漚集には、又題三教合面圖あり。雪村友梅も亦其の語録の中に、三教一致論儒佛不二論を收めて居る。梵仙竺仙は其の語録の中に、南院國師三十三回忌の普説の中に、三教一致に言及してゐる。明極楚懷、清拙正澄も其の語録の中に、三教圖賛があり、乾峰士曇の語録にも、亦其の賛があり、鐵庵道生、虎關師鍊等にも、亦その語録の中にこれ有るを見る。（宋松謙澄氏文學上三教思想研究、上村觀光氏禪林文藝史譚） 義堂周信は日工集の中に凡孔孟之書、於吾佛學、乃人天教之分齊也、不必專門、姑爲助道之一耳、經云、法尙可捨、何況非法、如是講則儒書即釋也、

と云つて居る。儒は或る點までは佛と一致すると云ふ意である。なほ日工集には、所々に孔老二教は、佛教とは大同小異であると云つて居る。東福寺の岐陽方秀は當時盛に宋學を鼓吹した人であるが、其の不二遺稿中に、儒佛不二論を唱へて居る。此の外

夢巖祖應の早霖集

仲芳圓伊の懶室漫稿

西胤俊乘の眞愚稿

惟肖得巖の東海瓊華集

慧鳳翺之の竹居清事

村庵靈彦の村庵稿

周興彦龍の半陶稿

桂菴玄樹の島隱漁唱

横川景三の京華集

萬里周九の梅花無盡藏

季弘大淑の蕉庵遺稿

月舟壽桂の幻雲集

雪嶺永瑾の識蘆稿

等にも三教一致に關する詩文が見えて居る。此の外、翰林五鳳集にも南江宗侃、驢雪應潮、仁如集堯、春澤永恩等の三教圖の語がある。建仁寺の兩足院所藏三教圖（國寶）に筆者不詳金華阿徒罕臚叟と正宗龍統の賛がある。金華阿徒は何人なるや未だ詳かならず。龍統は建仁寺の名僧、明應年間に寂した人である。異制庭訓往來所載天龍寺悅宗禪師に奉る書に、法會の時の飾道具の中に三教圖があ

る。一條兼良の如きも、その著文明一統記、樵談治要の中に、内典外典一致儒佛一致を唱へて居る。斯くの如くにして、室町時代には、佛即儒の思想が横溢して居た。此れ一には、前にも述べた如く、宋代に於ける排佛說對抗論の影響を受けて、其の説を其のまゝ輸入したものであるか、又一には當時我が國に於いても、宋學流行の兆があつたので、早く之に備へんがために、儒佛一致説を唱へたものであらうかと思はれる。然るに其の結果は之に反し、本末顛倒して、佛者却て宋學の人となり、跼陽方秀以下の如く儒者なりや佛家なりやを分つこと能はざるに至つた。されば、道元禪師の如きは、三教一致の説を難じて、壞佛法のともからなりといつて居る。正法眼藏諸法實相卷に曰く、

また三教は一致なるべしといふ、あるひは三教は鼎の三脚のことし、ひとつもなければ、くつかへるへしといふ、愚痴のはなはたしきたとへをとるに物あらず、かくのこときことばあるともからず、佛法をきけりとゆるすへからず、ゆゑいかんとなれば、佛法は西天を本とせり、在世八十年說法五十年、さかりに人天を化す、化一切衆生皆令入佛道なり、それよりこのかた、二十八祖正傳せり、これをさかりなるとし、微妙最尊なるとせり、もろもろの外道天魔ことごとく降伏せられをはりぬ、成佛作祖する人天かすをしらす、しかあれとも、いまだ儒教道教を震旦國にとふらはされは、佛道の不足といはす、もし決定して三教一致ならば、佛法出現せんとき、西天に

儒宗道教も同時に出現すへし、しかあれども、佛法は天上天下唯我獨尊なり、かのときの事をおもひやるへし、わすれあやまるへからず、三教一致のことは、小兒子の言言におよはす、壞佛法のともからなり、

元來佛教を護持せんための儒佛一致説より轉じて、遂に形は佛者にして内容は儒家たる者を出すに至つたのは、又奇なりといふべきである。然しながら、此れ實に當時の時代思潮を語るもので、僧家も亦知らず識らず、其思潮の中に巻き込まれて、佛を離るゝの傾向を生じ、佛法衰微の兆候を示したのである。即ち形式化した宗教は、其力を失ひ、之に代るに實踐的な儒教が要求せられたのであらう。

三教一致は老儒佛一致の説であるが、更に轉じて、桃山時代の頃には、神儒佛一致の説が起つた。天正十九年相國寺承兌の執筆にかゝる秀吉より印度臥亞の總督に與ふる書には、

陰陽不測之謂神、故以神爲萬物根源矣、此神在竺土喚之爲佛法、在震旦以之爲儒道、在日域謂神道、知神道則知佛法、又知儒道、（拙著增訂海外交通史話參照）

といひ、又慶長十年承兌が家康の命によつて印行した周易の跋文の中にも、

古今學儒書者排斥佛經、學佛經者排斥儒書、是世之常而共不辨真理也、釋尊生中國設教、則如周孔、周孔生西天設教、則如釋尊、儒釋元來不涉二途、如鳥兩翼似車兩輪也、

とある。之は儒佛一致の説である。なほ江戸時代の初頃に作られた物語類の中にも、三教一致を説くものがある、寛永十五年に朝山意林菴が作つた清水物語には、清水參詣の順禮と一老翁と談話の體を以て、道儒を上げて佛教を貶した。之を駁した祇園物語といふものには三教一致を説いて居る。大佛物語（寛永二十一年板）には、京大佛參詣の行脚の僧と佛神儒三徳を合せた一貫といふものと、神儒佛三教一致を説いて居る。糺物語（承應三年板）には賀茂參詣の者と幕の内で歌ひ舞へる上臈との物語の間に、神佛一致を説いて居る。後に起つた石田梅巖一派の心學も、亦神儒佛一致の説である。但し心學には儒教分子が多い。以て佛教の衰を見るに足るものである。

斯様にして形式佛教に對する嫌厭不滿の情は、民心をして自ら儒教に向はしめて、排佛の思想が起つた。排佛思想に關する著作は、儒家、神道家、經濟學者及び政治家の間に夥しく出たが、之に對する辨護としての三教一致論といふものが復出た。森嚴塾（尙謙）の護法資治論は其一つである。嚴塾は佛家の出身で、後儒家に入つた。佛の立場から三教一致を説いた。同じ三教一致でも室町時代の佛教隆盛の世に於て、唯議論三昧に三教一致を説いたので、必しも排佛の氣勢ありしにもあらざるを、支那の一致論に倣つて説いたものが多かつた。嚴塾のは之に反して、當時頗る盛であつた排佛論に對する駁論であつた。寶曆十二年三教舍主人武田大の著した大和三教論（前編四冊後編三冊、沙門玄定校、寛政二年刻）も亦佛法者の立場より、神儒佛一致を説いたもので、儒者の排佛論

就中荻生徂徠等の説に對して辯じたものである。

江戸時代に於ける佛教の衰微は、儒學が僧侶より離れて俗人に移つたことに於ても見られる。即ち反佛教の傾向世俗的傾向があつて、儒者の初め僧衣を着た者も、後には之を脱いだ。藤原惺窩、林道春、谷時中、山崎闇齋の如きは、其著しい例である。またその後も、儒者は尙頭を剃つて士分に列せられなかつたのを、林鳳岡に至つて、遂に髪を蓄へて士分となつた。先哲叢談林鳳岡の條にこの事を記して曰く、

及國家致隆平、儒者別立家、然猶目爲制外之徒、禿其顛、不列士林、此戰國之類俗未及革也、鳳岡慨然以爲、儒之道即人之道、人之外、非有儒之道、而斥爲制外者、可謂敝俗矣、時大君崇儒術、蒙命種髮、稱大學頭信篤、此爲元祿四年正月十四日事、於是和田春堅稱傳藏、大河内春龍稱新助、林春益稱又右衛門、人見沂稱又兵衛、坂井伯龍稱三左衛門、伊庭春庭稱五大夫、深尾春安稱權左衛門、數人皆儒林門其餘列國儒者、盡改名變形、以入士、至今人無賢愚知儒者教主世用、實鳳岡之力也、佛教の權威を失つた様子が見られる。將軍の贈號も、多く典據を儒書に求めた。鹽尻に此の事を記して、前將軍綱吉公薨去の後、勅定あつて、常憲院と崇號を諡せられたが、此の號は書經の胤征の文字である、足利家に於ては、尊氏の等持院と諡せられたのは、禪僧の奉つた佛書の文字であり、それより代々僧家の號した院號である。「今我國家東照の御宮號は更なり、台德公より以來、皆聖經

の正しき御德號を勅授まします事、いにしへに例しなく、今も賢き典則にこそと、おぼけなき御事なから、これもこれも亦治世のすかたなりとそ覺えたてまつるのみ」と云つて居る。即ち足利時代の贈號が、佛教から出て居るのに比べて、佛教衰替儒教隆盛の對照が現れて居る。

繪畫彫刻に於ても、足利時代に於ては、佛教に關する題目が比較的多かつた。それも平安朝や鎌倉時代に比べると、餘程薄くはなつて居るけれど、猶寒山拾徳とか達磨とか、多少佛教に關するものが多かつた。桃山時代からは、支那の世俗的故事或は二十四孝とか機械圖とか耕作圖とかいふやうな子弟訓育に資するものが之に代つた。宗教的作品に傑作が少くなり、俗界の世間的題目のものが之に代つた。此の傾向は江戸時代に至つて益著しくなつた。佛教藝術の進歩が停滯して、宗教的作品の傑作は跡を絶つた。以て佛教の社會的勢力の減退の徴と見ることが出来る。

音樂に就ても、亦此の傾向が認められる。平安時代より鎌倉時代にかけて、聲明が起り、講式が發達した。此れより變遷して謠となつた。謠には聲明及び講式の分子が少くない。是れ佛教文明の俗界音樂への影響と見るべきものである。之に由て觀るに、平安時代は流石に佛教文明と俗界との關係が濃厚であつた。佛教音樂即聲明が其の儘殆ど俗界音樂であつた。其の影響は朗詠和讃今様などに現れる、鎌倉時代の講式は、なほ佛教音樂といふべきものである。足利時代に至つては、謠曲が内容にも外形にも佛教分子が多いといふだけで、平安朝鎌倉時代の如く佛教との關係が密接でな

い。江戸時代に至つては、佛教の影響甚だ稀薄であつて、殆ど其の痕跡を止めず、純然たる俗界のものとなつた。以て佛教の一般文化に及ぶ勢力の衰へたるを見るに足るのである。

斯様にして、江戸時代には、民心は佛教を離れた。僧侶寺院は人民の嫌惡と輕侮の目的となつた。寛永元年三月徳峯老人作、同二年烏丸大納言光廣の跋ある「目覺し草」の内に、當時僧侶が徒にその服裝を美にし、名利にあこがれて道心薄さを冷笑せる一節がある。

此比のうき世わたりの若法師、受戒のさたはさもあらで、うら紫の小袖きて、こづまうしろへ引まはし、絞文金砂の平帶して、きぬもし衣身にまとい、染わけたびに紫紐、紅うらの丸頭巾、黄纈纈のきんちやくに、蒔繪梨地の印籠さげ、からのやまとの緒どめして、身なり足ふみ、ふりかゝり、人にかはれるおかしけれ、是はさもなし、行跡のたうとき譽ありけるも、いかなる寺の貫首にも、あをがれんとはかり事とぞきこゆれば、佛日のひかり、いたづらに名利の雲の立おほひて、法の師とたのむべくもなし、もとより父母の命にて、心ならず出家したる輩は、何の道心あてるべき、たゞ世に多きものとは、名利度世の惡知識、因果撥無の惡法し、こと更在家のなま禪法、小知は菩提の妨にて、不得心なるを宗として、道にたがひ法にそむけり、たゞ世にはやる物としては、愛宕白山そらせいもん、緩怠名聞すきたばこ、雜説しうく聞取學文、邪正もしらぬすみ衣、とにもかくにも徳つかんとぞいのりける、

道心はもとよりもなしそらひしり珠數のつるにてうき世いのれり

寛永十三年の作にかゝる可笑記に

むかしさる人の云るは、當世の出家は何として智慧もなく行ひもかひなく、いはんや道心の事思ひもよらず、只可慾をこのみ不知足をもつぱらとし、榮花におごり飲食をほしいまゝにす、可慾とは女わか衆をすく事、不知足とは金銀諸玉をあきたらずほしがる事、榮華とは家普請庭づくり衣類裝束をはじめとして、さまざまの諸道具を色々の物ずきに、けつかうする事、いんしゐとはめし(こけ)かな菓子めしめんいすい物などの、のみくひ物のしなじな數々の料理だてする事……我聞出家はかしらのかみとも、心の塵をそりすて、身の衣とともに心のあかをすみにそめ、學文修行をとめ、智慧廣大に理分明にして、じひふかく義あつきとこそきゝし物をと、かたりければ、そばなる人のいへるは、それは上代清淨の出家の事、末代濁穢の坊主どものよからぬこそ道理なれ……末世當代の坊主共は、ただいやしき百姓町人ばらの子孫、身のすぎはひととしてかたちをかへたるまでなり、さるほどに淨土宗日蓮宗一向宗の坊主共こそ、世におほけれ、この宗旨いづれも心やすき宗旨なればなり、

之によれば寺院は遠く其の本旨から離れて、凡庸爲す無き者どもの慾望生活の巢窟となり、それに都合のよい、修行の樂な念佛宗題目宗が著しく流行つたといふのである。但これは淨土日蓮一向宗

等に對して好意を有せざるものゝ一種の偏見で、僧侶の出身を云々し、閥族階級的觀念に囚れた嫌はあるが、とにかく僧侶に對するある一部の感^じを語るものとして、注意の値はある。鈴木正三の二人比丘尼にも同じ様な一節がある。

むかしはどう心有る人は、てらに入てちしきのをしへをうけ給ひしが、今は昔にかはり、少しもどう心有る人はてらをいでらるなり、其ゆゑは、ちしきに道心なく、あつまる僧も心ざしなくして、おそろしき心なる故なり、心ざし有る人のまじわるべきやうあらざれば、寺を出るはことほりなり、かたぐのごとく、世をすつる人も、しゆつりの道を思ひ給はず、さるほどに、ざぜんくふうといふ事を夢にもしらず、少しなりとも物をする人にまざらん心をはげます^(マサカ)、しかるあひだ、ついにめうりのきづなをだにはなれず候

こゝには道心有る人は、却て寺から遁れ出ることを語つて居る。此れよりすれば、聊かも道を求めんと欲するものは、翕然として儒家に趨り、儒林に英傑の並び起つたのも當然である。熊澤了介は集義外書に於て、僧侶に愚劣の者の多きことをのべて、

佛者千人の中、九百九十人餘はあしく、五六人も無事なる凡僧あれば、これを出家らしきといへり、凡僧ならぬといへるは五千人の中に一人、一萬人の中に二三人なるへし、故に佛者もいへり、坊主のかくあしきこそことはりなれ、子多持たる者、何にもならざる子をは、坊主にせむといへ

り、みつからぬもひ立ものも、成佛得脱の志にて出家するものは、萬億の中に一人もまれなり、武士にはなりかたく、農工商とも成かたければ、せんかたなくして、後世の爲に出家せり、まれによき坊主のあるは、子の生付あしからぬとも、かたつくへきやうなきゆへに、坊主の弟子にする有、これも我とおもひよらざる事なれば、つとめはよからすといへり

といひ、更に同じ著者は、大學或問に於て、今の僧は盜賊なりと喝破して居る。曰く

佛法出來てよりこの方、今の此方のやうなるはなし、佛法を以て見れば、破滅の時至れり、出家も少し心あるものは、今の僧は盜賊なりといへり、實眞に佛法によりて出家したるものは、萬人に百人ならん、其次は其身かたはなるか、土農工商の一人の働きならざる者は、是非なく出家したるもの、萬人に千人もあらん、其外は皆渡世の爲に、姦謀をなして、姦欲肉食に飽たる事、在家に勝れり、同宿諸化江湖^(所)なとして、大寺に寄居者、多くは惡人盜賊なりといへり、在家の者知て指しいへり、北狄きたるは大飢饉にて、盜賊となる者は、此數十萬人の出家ならん。

此等是一般に、排佛思想に傾いた説ではあるけれども、こゝに言へることは、恐らく事實であらう。僧侶には凡人が多い、劣等の者が多い、何にも成れさうも無い子を以て坊主にする、働きのない者が寺に入る、惡者が僧侶となつて姿をかへる、斯様の見方は、尙排佛論者の中には非常に多くあることであるが、其等は或る先見に囚はれた嫌もあるからして、茲には略する。故老諸談といふ書の

中に、家康が當時僧侶の墮落を慨いたといふ話を載せて居る。その文に曰く、

一或時天海僧正、崇傳長老、舟橋侍從、林道春伺公申され、御雜談の序に、今は世の末に成り儒も佛も道の正き事なしと見へたり、まづ僧は三衣の外、少の儲なく、持齋戒行有へき事なるに、酒を飲、美食を求め、世の崇敬するに隨て、徳無き僧も錦繡を座具に用て、我に金銀米穀を抛つ者おは、信心の者成と贊めはやし、衆人の心を誑惑し、眞實菩提心を失ひ、名聞利用^(利)の事を專にす。是心にて、假令堂塔を守居ても、畢竟は天狗の眷屬たるへし、善根佛種と云は、是にては有へからずと思ふ也、又儒者は書を讀、故事を覺へ、詩文を作り、又佛法を嫌ひ、異端とす、其語聖人賢人の詞なれば、定て子細有へし、され共、今世に聖人なし、又佛法も捨かたし、此法、天下の鰥寡孤獨を救ふへき法也、老て妻なき者、佛弟子となり、衣鉢を授け、渡世の艱難を遁れしめ、忍辱の袈裟を與へて、諸人の供養をうけ、乞喰となり、心を安閑になさしむ、又夫なき婦女を尼となし、媚を求、化粧する姪行を忘れしめて、教戒を専らせしむ、賤男賤女戒行正しく、念佛讀經するを以て、大名高家の簾中、御臺の座上へ請し、禮拜をなされぬ、幼して父母なき子寒の者養育せられ、弟子となし、學問執行させ、其器量に従ひ、法燈を挑げ、戒光を耀し、慈命を繼しむ、老て子なく、慾と貪とに困窮する者をは、寺院に養^(ひ)ふ置、佛灯を守らせ、堂室を掃除せしめ門番夜廻りの役をさせ、鐘を撞太鼓を打す勤をなさしむるは、好教にして、儒者の誹る事有まし

然共今多く溢れもの正體なきものを撰なく養ひ立て、衆生を欺き、米錢を婪り取、邪なる僧尼多し、道德有て人を化度する名僧は、萬人の内一二人ならてはなし、武士出家儒者何れも眞の人絶果て、似せ物の徘徊する時節に成たるとは、何も思はぬかと仰せ有、

この故老諸談といふ書は、著者未詳で、その製作年代も明かでないが、恐らくは徳川中頃のものであらう。従つてこの話も、果して家康の口より出たものであるか否か、確かではないが、その頃の人の佛教に對する感想を現したものと見れば、大過なからうと思ふ。豊内記一名秀頼事記にも、亦佛法に對する嫌厭の情をあらはした記事がある。

未ノ代ニ成リテハ、根本ノ王道ヲ亂リ、但後生コソ本ヨトテ、我民ヲステ、政ニ怠リテ、夢ノ浮世ニ遊山コソ有タケレ、死シテハ僧ヲ供養シ、經ナトヨミテ、佛ト云モノニ成ルヘシト思ヒ、政ニ怠、民其澤ヲウケヌコソカナシキ事ナレ、君タラン人、佛道ヲ願ハ、深ク心得有ヘキ事也、ニクミモセス、好ミモセス、我道ヲ本トシテ怠ラヌハ、佛道ハ僧ノマ、ニアランコソヨカラン、在家ヨリサノミ入リスキタランハ亂ノ本タルヘシ、是故ニ仁皇十代ノ比、伊勢ノ國五十鈴ノ河上ニ、天照大神ノ宮ヲ作り給フニモ、神カキノ内ヘ僧ヲ不入、我朝ハ神道ヲ以テ治、異端ヲ貴ヒサルシルシ也、

この書も亦、著者も製作年代も未詳で、やはり徳川中頃のものかと思はれる。これは、君たるも

のは佛法にあまり深く入らぬがよいといふのであつて、當時佛法信仰の薄らいだ様子が察せられる。上田秋成の膽大小心録の中にも、門徒宗は今最も盛であるが、これも最早衰ふる兆候が見えて居る寺は唯愚民の遊所である、僧侶にはたのもしき人もなきのみならず、不如法姪奔利慾の深きもの多く、然らざるも、たゞ糊口の爲めに過ぎざるものであるといつて居る。即左の通である。

佛法のさかんなるは此國にこゆる所なしとぞ、西竺のおとろへ、中土にや、禪宗のみ寺院を建立すと、此國は古へ華嚴、法相、眞言、中世より善導の念佛、又達磨宗、日蓮宗、今にては門徒宗のさかんなる事、是に皆おさるゝばかり也、いづれも盛すいありて、此門徒と云宗も、此頃はいきが衰ふべき端を見せたりき、されども其宗々のいたづら事なる事、國の爲にもならず、たゞ愚民の遊所とこそ見ゆれ、若き者の遊所にかよひ初てより、一夜も宿にあらじとするに同じく、老たる男女は、必宿に一日もあらじと立走りて、参りつかふなるべし、又さかんなるは、狐のつきたるが如し、是は釋尊の本意にあらざるべければ、必竟遊所と思ふて、ゆるしおかるゝなるべし、寂々たる寺院は、佛も安座ましますかと思ひて、門に入ては心すめる也、高座に上りて雄辯の僧と云も、座所を下れば、大かたは俗民にて、たのもしき人もなしとこそ思ゆれ、たゞ今にては、僧も天下の民の業とゆるされて、萬事は見ゆるしたまふべし、あまりに不如法の僧は、刑ありて橋頭に人に面をさらされ、又重きは島に流さるゝ也、然れども不如法は改るとも見えぬは、不如

法の世界の佛法にて、姪奔ならずとも、利慾にふかくして、財をつまんとするは、いかにぞや、一身の往□□此財往が爲に、これたゞ利慾は婦人の情にて、つむをのみよろこばしきなるべし、人情につりて、世法にうとき、愚人と云べし、新地に寺院たつかと思へば、又廟につく、或は宗門をかへる者、賣利の町人の宅居におなじ、庵住してさる不淨に交らぬ僧もあれど、是も稀也、談義とて法を語りて諸國に奔走するあり、皆いたづら事にして、糊口のためのみとぞ思はるゝ、俳諧の中にも亦佛教衰微の徴候は歴々として見える。殊に西山宗因の俳諧には、神も佛も全く滑稽化せられ、鄙俗のものとして、取扱はれて足利時代に於ける山崎宗鑑と好一對をなした。宗因の句に

さるほとに千々にもこの金ほとけ

さらにまた法のはなふれ普賢像

釋教百韻の如きは、殆ど皆此の類である。

芝居淨琉璃についても、亦同じ様子は見える。江戸時代の初に出たち國がぶきには、念佛踊などがあり、淨琉璃にも宗教的分子が多少現れて見えるが、近松の頃になると、其の作に出るものは、唯普通の形式的信仰ばかりであつて、觀音阿彌陀佛などの名は出るけれども、深い信仰の著しく見えるものはない。小説界に於ても、西鶴の男色大鑑に、

情の大盃潰膽丸

楳柚まのぼしといへど法師程世に氣さんじなる物はなし、したい事してあそび寺、それ／＼の宗旨に學びあきたる經を讀て、諸旦那に衣を着て逢より外勤る事もなく、包み銀のたまるを化あだにつかふもよしなしとて、戀のはじまり、芝居子狂ひ、是ぞ出家に備はりし遊興、色座敷にも身の一大事を忘れず、精進かたく燒酎柳茸のにしめ物、水栗酢味噌に天木蓼あまぎ、あまのりに梅干の吸物、是にて夜もすがらの長酒、よくも呑るゝ事ぞと、此眞言まことごある心ざし殊勝千萬にぞ見えける、いかに佛の觀面にしるしませ給はぬとて、長老様の楳焼も出來はせぬ事ぞかし、肴を心まかせに女濡ちよなれ、世間はばかり、出家にならぬが損なるべし、

こゝには僧侶の勤行が、全くの外面的形式となり了り、淫樂のみが其全生活であつて、俗人羨望の的であることを述べて居る。なほ西鶴は、本朝二十不孝に於いて

さるほどに今時の出家氣質ほど可笑しきはなし、智慧才覺には構はず、武士の家にては弓馬の藝に疎く、又病者にして勤めのなり難きを、勧めて法衣を着せ、町人は算用愚かに秤目覺えず、日記附さへならざるを、とても商人には思も寄らず、世を樂み墨染になれと、親類了簡にて髪を下ろさせ

と、劣敗者の出家となる様子を描出して居る。わが衣文化十二年條にも、亦僧侶の素質のよからぬ

より、つひに墮落する趣をのべて居る。

今の寺院出家に、博奕團ひものせぬものは、法類にて付合せず、鰯うなぎ鶏卵など喰ざる坊主、何宗によらす破戒の者としてそしるかや、いかにも古への出家は、幼稚の時より小兒の中にも拔群すぐれて叡明の者を、父母も末々は智識にもならんとて、博學の僧にしたがへ、學せしゆへに、名僧も出けり、今は子供の時を不行義者にて、小坊主なともし、父母の手にも餘るものを、是は出家よからんなどいって、あたまこそげて、無理に衣をさせ、所化の新發智のと取はやし、愚智無智の凡俗、其かくしての惡行はしらす、經さへよめへ、僧と心得、あてもなき未來を願ひ、過分の施物を遣すゆへ、生質の惡念成長に隨ひ、増長して、終に惡事に至るハ實に是非なき事也、

嘉永六年十月、廣敷添番並宮本如轉養子宮本庫之助上書に、海防に關するものゝ中に、僧侶の驕奢を制すべきことを論ぜる箇條がある。旗本階級の人々の佛教に對する態度の一斑を見んが爲めに左に引用する。（大日本古文書幕末外國關係文書之三）

吾邦佛法を尊信致し候者不少、右に隨て諸家之僧侶甚驕奢致し、大宅を構へ、金銀澤山ニ貯、且遠國民間之寺院ニ至り候而も、檀家之愚昧を惑せ、恣ニ金銀を貪り、甚敷に至り候而も、自境内之山林を荒し、其上ニは家具美麗を極め、都而歴々之御旗本ニも並ひ候位ニ而、何之一益も無之、抑寺院と軍人假陣屋之用意ニも可有之哉、私儀更ニ承知不仕候得共、家柄之御旗本又ハ披

群之人士も、塾居困窮致し、無益之僧侶富饒ニ有之候事、尤可歎之至リニ御座候、實は夷狄ニ對し候得と、僧侶ハ腹心之疾ニも可有之、因而之遠國近在奢侈之寺院と、嚴敷御察當被仰付、大宅を破却し、其餘國中金銀諸材木融通之一助とも奉存候、右ハ海防ニ掛リ候事ニと無御坐候得共、諸侯御旗本日夜國家ニ力を竭し、又は拔群之人士塾居不被用、然るを無益之僧侶富饒ニ有之候事難默止義ニ付、此段海防之外策ニ奉申上候、

安政四年伊達家領中僧侶の過剰を制するについて意見を徹した時に、佐藤昭因の上つた意見書に、出家の義領分中寺々凡數千ヶ寺はあるであらう、その住職小僧等迄の數、凡一萬人はあらう、その内諸士の子弟は勿論百姓町人に至るまで、願を出さずして出家したるものは多數で、願濟のものは稀である。今すべて之に還俗を命ずれば、本山に訴へ、本山にては佛法破滅の大事など、申立て、取騒ぐであらう。されば、今の策は、是まで出家したるもの、還俗は之を免し、その人別を改め、此後願出ずして新に出家せるものは、之を還俗せしむること、したい。「一體出家之風俗近年別而類敗仕、僧行相立候出家は稀々之様ニ而、却而四民之害ニ罷成候共、出家教道を以、四民行狀篤厚罷成候儀は、一圓無御座、素々出家徳道を心指、佛ニ入候者誠ニ稀々に而、多くは父兄死罪横死等之子弟、又ハ父母兄弟癩病等之子弟、或は士凡百姓等ニ至迄、極難澁之上、大勢子供有之、養育及兼候者、其外不具等ニ而俗業學兼候様之類ニ相聞得、詰リハ身過キ相及兼、出家仕候

者多分ニ可有御座と奉存候處」此等の中には、據なき子細のものもあるであらうから、一切之を禁ずることも差支あるやも知れず。よりて據なきものは、その親類に又は手當を與へて相應のものに養育せしむるやうにしたい云々。（大日本古文書伊達家文書之九）

と陳べて居る。こゝにも亦僧侶素質の劣惡、其暗愚無能がさらけ出されてある。

大岡政談の中に、小間物屋彦兵衛の話がある。盜賊の勘太郎が、金持の隠居の所へ行つて、寺へ奉納せんが爲めに、佛壇に収めて置いた金五十兩を盗み出した。其時の勘太郎の言に「役に立たぬ寺への奉納」といふ事がある。大岡政談といふものは、著作年代は詳かにせぬが、恐らく幕府の末頃に近いものであらうが、此の勘太郎の一言の中に、當時の思想、即ち寺院僧侶の國民に對する信用の全く地に墜ちた状態がよくいひあらはしてある。國民は寺院僧侶に對して嫌厭の情を通り越して、全く之を輕侮嘲弄するやうになつた。佛教の衰微は、こゝに至つて極點に達したといはねばならぬ。

慶應二年釋龍曉は諭童辨二冊を著して、中に「デモ坊主蝟坊主」の辨を掲げて「デモ蝟」は國の費、游民國賊なりとの謗難は之を通るゝに所なしとて、佛法の自滅に至らんことを憂へ、佛子の驚覺を促して居る。佛者の口より出た語として、殊に興味深きものあるを覺ゆる。即左に引載して以てこの篇を終る。

情按スルニ、他山ニハデモ坊主多ク、我宗ハ本ヨリ蛸坊主也ト云ヘルコアリ、其イハレハ、先佗山ニデモ坊主多トハ、嘗テ聞ク、當世ノ僧達ハ、出離解脱ノタメ且 皇國守衛ノ爲ニ發心セルハ甚ダ稀ニシテ、或ハ子ノ多キハ、一人ハ坊主ニデモスルカ善カラント、稚キヨリ寺門ニ入ルアリ、又至テ國窮ニシテ、身ヲ治ルノ便リナキハ、坊主ニデモ、又生レツキ虛弱ニシテ、何事モ仕遂ルコノ出來カヌル者ハ坊主ニデモ、又身體不具ノ者ハ世ノ交リモ六ケ布ケレバ、坊主ニデモ、或ハ繼子並ニ連子ノ類ヒ、内ニ在テモ混雜ナレハ、坊主ニデモ、又人ヲ殺害シ、若ハ盜攘ナドシテ、其事漏レ捕ハレントスルノ族ヲ、當難ヲ遁レン爲ニ坊主ニデモ、或ハ右等惡事我身ニ覺エ有テ、事未タ露顯セザル内、逃去リ寺院ヲタノミ、坊主ニデモ、又爵祿ノ家ニハ、其嫡子ハ嗣系ヲ繼ギ、其位ヲ得ル、二男三男ハ然ルヘキ養子口モアラズバ、卑劣ノ所作モイカバト、時ヲ待面ニ、身ヲ寺門ニ寄ヒ、坊主ニデモ、又帶刀ノ身ナカラ、時ニ臨ンデハ先陣シテ潔ヨク討死スルヲ功名トスルト云程ノ勇氣ナキハ、坊主ニデモ、又本ハ豐饒ニ暮セシカド、自然不仕合ニシテ、困窮ニ及ビ、上馬ノ下シトヤラ仕方ノナサニ、我手ニ髪ヲ剃リ、坊主ニデモ、是等ノ種類不少、眞實ニ無常ヲ觀ジ、菩提心ヨリ發心セルハ稀也ト見エタリ、サレバ師鍊モ是等ノ坊主ヲ歎息シテ、多祭之族出ニ雜雜ニ而補家産、寢約之民放ニ于壯食ニ寺供、或草賊迫ニ捕逮ニ而來投、或孽子漏ニ擧收ニ而寄歸、佩刀而互剃、褻服而不染、是等之類吾法亡矣トイヘリ、昔モ恁デモ出家多カリシト見エタリ、

思ヒ合セ知ヌベシ、次吾眞宗ハ都テ蛸坊主トハ何ヲ以テ云ゾナレバ、若寺院ニ男子出生スレバ、性ノ虛實ヲイハズ、體ダノ具不ヲ論ゼズ、機ノ善惡ヲ撰バズ、又材不材ヲ沙汰セズ、生レタマ、直ニ坊主ナルガ故ニ、全ク蛸ノ頭ヲノ生レタマ、丸ク髮ノナキニ同ジキガ故ニ、蛸坊主ト云ト也、爾ルニ、其性善ニ健カニ、材智有テ佛法ヲ學ビ、而モ道心堅固ナルハ甚ダ以テ稀ナルベシ、故ニヨキ師ニ誘ハル、カ、同行ニ耻ル意ノ發ルカ、自ラ無常ニ逢フテ改心セルカ、又親ノ心得ヨク、幼稚ヨリ道心ヲ教ヘ諭セルガ故ニ、自然坊主ラシク成リシカ、何レ善緣ニ值遇セザレバ、僧ラシクハ成リ難シ、又適學問機ニナルハ、其學問ニ種々有テ、第一道心ヲ先ニタテ、深ク佛法ヲ學ブベキナレハ、是亦甚ダ難シ、若又惡緣ニ遇フハ、イカ程ノ惡事ヲカナサン、更ニ以テ量リ難シ、是ノ如ク種々無量ニ人品異ナルアリ、然レハ皆悉ク男子ハ坊主ナルガ故ニ、蛸坊主ト云ンモ可ナランカ、サレバ如斯デモヤ蛸デハ、最モ佛法ヲ不知モ亦道理カナレハ、之ヲ許サバ、全ク國ノ費ヘ游民國賊ノ妨難遁ル、ニ地ナシ、尙終ニハ佛法自滅ノ場ニ至ラン、佛子覺覺セズンバ有ベカラザル秋也、